

話題1 「サイエンス・スクール2006」開催しました！

集まれ！未来の科学者たちをキャッチフレーズに、県教育委員会主催による「夏休みサイエンス・スクール2006」と題した夏休み親子学習講座を、県内8箇所の研究機関の協力により開催しました。

水産総合研究センターでは「栽培漁業と希少魚類の保護」をテーマに、8月1日から3日までの3日間の日程で、小学生7人と保護者を含めた5家族が参加されました。

初日、2日目は種苗生産研究所（富津市）で、栽培漁業を目的とした海産魚の講義と実習が行われました（詳細については他記事を参照）。



講義風景

翌3日（最終日）早朝からバスによる長距離移動（木更津から）になってしまいましたが疲れも見せず、当内水面水産研究所（佐倉市）には予定時刻より30分以上早い到着でした。



顕微鏡観察

当初予定にはなかったのですが、淡水魚に慣れてもらうため魚類展示室（印旛沼を中心とした淡水魚）で、魚たちの生態についての即席講座を開きました。

午前中には松丸上席研究員が講師となり、千葉県内の希少魚類の保護（タナゴ）を中心とした講義を行いました。

関東近県で自然の状態でミヤコタナゴの生息している唯一の県が千葉県であり、保護対策が非常に大切であること。しかし、保護を目的に改修した水路では必ずしも効果が上がっていないこと。保護するための難しさや、これからどうしたら効果的に保護していくことが可能か、参加された児童たちと一緒に考える勉強会でした。

午後の部では、タナゴの採卵、採精操作を行い光学顕微鏡を実際に使用して観察しました。スライドガラスにのせた精子に、少量の水を加えると沢山の精子が一斉に動き出す様は圧巻であり、歓喜の声も上がりました。

当初は緊張し戸惑っていましたが、最後の方では、魚そのものを直接触ったことが無い女子児童が積極的に魚を手に取り、そして、採卵操作を行い生命の神秘さに感激していました。



最後にこの3日間を受講された7人の児童には野島所長よ

り終了証書が手渡され、児童それぞれの顔には達成感が満ち溢れていました。自然の大切さや、生物への興味をタナゴを通じて体験した1日となりました。

話題2 カワウの食性を調べています！



一羽のカワウが食べた胃内容物
(右、胃本体)



ねぐら付近では大量のフンにより
樹木が白く汚れている。

カワウをご存知でしょうか？黒い色をした泳ぎのうまい鳥で魚を主な餌にしています。千葉県では、行徳鳥獣保護区のねぐら（夜間にカワウが休息する場所）や小櫃川河口のねぐらで多く観察されます。

このカワウが近年、全国的に増えて魚を食べてしまうため、内水面の漁業者を困らせています。そこで、カワウがいつ、どんな魚を、どのくらい食べるかを明らかにするため、平成15年から千葉県内水面漁連、夷隅川漁協、養老川漁協と協力して、カワウの食性調査を行っています。

夷隅川のカワウの胃の中からはニジマス、オイカワ、ヨシノボリなど魚類12種とアメリカザリガニがでてきました。養老川のカワウからは、アユ、オイカワ、ウグイなど魚類12種その他、テナガエビ、ヌマエビなどの甲殻類も出てきました。また、高滝湖・黒川だまりのカワウからはオイカワ、オオクチバス、ブルーギルなど魚類10種がでてきました。この結果から、いろいろな種類の魚を食べている状況が分かってきました。

食べられていた魚の大きさは、小さなもので全長3cmのウグイから大きなものでは全長38cmのニゴイまで幅広い大きさのものを食べていました。今後も調査を継続し、さらに詳しく調べる予定です。

豆知識 カワウってこんな鳥です！

ペリカン目ウ科。大型の水鳥で北海道を除く、全国の湖沼、河川、入り江等の水辺に棲息し、近くの林の地上や木の上にねぐらと言われる巣を集団で作る。独特の先の曲がった黄色いくちばしで巧みに潜水して魚を捕食する。

県内では現在、県指定「行徳鳥獣保護区」が関東地方最大のコロニー（営巣地）を形成しているが、かつては、浄土宗大巖寺（だいがんじ、千葉市中央区）の境内がカワウの棲息地として知られ、戦前は5万羽とも（現在、全国で5～6万羽）伝えられる。しかし、昭和40年代後半には棲息環境の悪化により姿が見えなくなったが、当時の隆盛は林間にひっそりと佇む「鶺鴒の森の塔」に記念碑として刻まれている。

